

ビルマ人の生活における仏教

工 藤 成 樹

ビルマ連邦を構成する五十以上の種族の中で、その約四分の三を占めるビルマ人の大半は、所謂小乗仏教と呼ばれる南方上座部に属する仏教徒である。イラワジ河流域や下流のデルタ、及び海岸沿いに散在し、主として農業を生活手段とする彼等は、個人、社会を問わず日常生活全般にわたって仏教と密接に結びつき、それに支配されている。しかし、こうして仏教と不可分の関係にある慣習や年中行事、或はそれ等の根底にあるビルマ人の思考方法も、仏教教義の上からはきわめて変形を受け歪曲され、純粋性を失っている。印度渡来の仏教が、ビルマ人の伝統や解釈によってきわめてビルマ化されている。あるものは土俗信仰である Animism と結合し、他のものは太陰九遊星といった Hindu 的要素を取り入れ、更にはビルマ伝来の占星術や鍊金術、数方陣 (inns) を入れて、およそ仏教とかけ離れたものが仏教の名の下に行われているのを見ることが出来る。今ここで、現在のビルマ人社会に見られる年中行事や宗教儀礼の中から、仏教のこうした歪曲された姿の実例を幾つかあげてみよう。

1.

ビルマ人にとって一年の中できわめて吉祥であり神聖であると考えられる日が幾つかある。ビルマ人の現在使用している太陰暦によると、満月を中に前半の十五乃至十四日が白月、後半は黒月と呼ばれ、各一ヶ月ごとに (1) Tagoo (2) Kazun (3) Nayun (4) Wāzo (5) Wāgaung (6) Tawthalin (7) Thadinjwot (8) Tazaungmone (9) Nataw (10) Pyātho (11) Tabodwai (12) Tabourng の名称を与えられる。ビルマ暦の正月 Tagoo は四月に相当するが、年間太陽暦との差十一乃至十二日は閏年を入れ、Wāzo を二度重ねることによって解決される。Kazun の満月の日は仏陀降誕、成道、入涅槃の日として尊崇され、Wāzo の満月は仏陀休息の始まる日として重んぜられるというように、各月とも満月の日はきわめて吉祥神聖な日であるが、とりわけ Wāzo (七月)、Thadinjwot (十月)、Tazaungmone (十一月)、Tabourng (三月) の満月は、誕生日、婚礼日、Shinbyu (入門式) と並んで重視される。こうした吉祥と考えられる日や、或は時ならぬ大風や豊作の後、病氣回復の祈願の際に行われるのが Paya Kozu Sum Kywe である。訳せば、尊崇せらる可き九神への供養の意である。

Wāzo から Thadinjwot にかけての三ヶ月は、地上にいた仏陀が雨期の到来とともに、休

息の為天に上り、兜率天 (Tusita) に滞在する期間と伝えられ、この間休息の仏陀をわずらわさない為旅行、結婚、転宅等は中止される。十月の満月の夜、再び地上に戻る仏陀の道を照す為、万灯を以て捧げる灯の祭り (Light Festival) が行われるが、こうしたビルマ年中行事の殆んどすべては、元来仏教にその起源を持っているわけではなく、既に存在していた民間信仰や祭礼に後から仏教が結合したものである。例えば、第二の灯の祭りである Tazaungmone は民族神話をその起源としており、神話に登場する動物の形を真似て踊り、神への捧げものとして万灯を以て夜空を彩り馬鹿祭りを行った。馬鹿祭りとは、ジピューの実を家々に投げつけ、家人のその騒ぎに気をとられている暇に家財道具を盗み出し、それを思いもよらぬ所に置いておく祭りである。女性の下着が翌朝村長の家の旗竿の先に高々とひるがえっている類の祭りなので馬鹿祭りと言われた。仏教の伝来とともに、所謂夏安居の終りと時期的に一致するこの祭りが、多少の変容を加えてそのまま仏教行事の中に加えられて行った。神に捧げる灯火はそのまま兜率天より地上に戻る仏陀の道を照す意味に解釈せられた。このように、ビルマ年中行事における民族信仰は仏教との結合によって益々複雑な様相を呈して来るのである。

九神崇拝の儀式は Sayā (師) と呼ばれる専門職によつて執行せられるが、彼等は仏教教団における比丘や沙弥とは全く別の俗人の職業祈禱師である。彼等が式場に持参する Kyaung Saung と名づけられる特殊な仏壇を中心に祭祀が執行されるが、この仏壇の上は仏陀の像を中心に、八方を取囲む八阿羅漢及び八 Gyos (天体) から構成されている。仏陀は東面し、周囲の諸像即ち阿羅漢や天体像はすべて仏陀の方を向き、東から南まわりに、Kuntinnya と太陰, Raywata と火星, Tharripotetarar と水星, Upali と土星, Arnandar と木星, Gawunpati と黒星 (Rahu) 一月や太陽の上に重なった時にのみ見られ、蝕の原因と考えられる星—Maunggalan と金星, Rahular と太陽が配置せられる。八阿羅漢の配置については、Ananda 即ちビルマ訛で Arnandar は、釈尊在世中常に傍に侍したことから東面する仏陀の背後西に置かれるといった理由があるが、詳細は1859年に書かれた Maungdaung Sayadaw の解説により理論づけられる。一方 Gyos の配置については、印度教的占星術や宇宙観の伝統を踏襲していると伝えられる。

式は師による宇宙万有の Nats の招請を以て始まり、次で仏陀、八阿羅漢、天体の招請がこれに続く。Nat はビルマ特有の Animism 信仰の対象で、現在でも、特に辺境山嶽地帯の少数民族の間で盛んに信奉せられている。ランゲーンの如き比較的近代化された町中でも、大樹の下にその樹の Nat を祭る小さな祠を見かけることがある。Nat は自然物や個人、或は社会組織や国家といったものにまで住みつき、それ等を支配する霊魂であると信ぜられるものである。その支配地域や支配権を認める者—具体的には米や果実を捧げる行為によって表わされる—に対しては保護を与え幸運を招いてくれるが、一端無視せられると逆にその者に危害を加え不幸を招くと考えられている。九神崇拝の式に招かれる宇宙の Nats とはこのようなもので

あるが、この場合は現在ビルマに広く流布している三十六乃至三十七 Nats, とは全く別種の二十八 Nats, 即ち五大（地水火風空）、三守護（Nāga, Garon等）、天宮守護、地守護、家守護、八星辰守護、一般の計二十八 Nats である。

このように、数多くの礼拝対象及びその内容の異質性からして、それがビルマ仏教徒のもっとも普通の日常行事の一つでありながら、純粹に仏教起源のものとは云い難い。仏教徒の儀式において、印度教的星辰の神々やビルマ的 Nat が、仏陀や阿羅漢とともに祀られ供養せられ、更にまた九神崇拝式に結びついている Nat 信仰が、ビルマ一般に流布する普遍的な姿と形式内容を異にしている点で、単にビルマ仏教と印度教が結合したという以上の別な要素がその中に見られるのである。

Kyeethe Lay Dat Sayadaw (of Kyeethe, Shwedaung, Prome) が1872年に書いた記録によれば、この儀式の風習は Taungoo 王朝の Bayinnaung (1551~81) のチェンマイ攻略以後のことであるという。即ち外国王である彼及び彼に代ってチェンマイを統治した末子 Nawrahtasaw を喜ばせる為、その地にいたタイの僧がその地方に広く伝わっていた印度教的九星礼拝の風習に仏陀及び阿羅漢を加えて紹介し、これが Nawrahtasaw を通して Taungoo のビルマ王室から全土にひろがったという。

仏と Nats と天体をともに礼拝するという敬虔なビルマ仏教徒の行為は、我々にとってはまことに不可解な矛盾であるかもしれないが、未来における阿羅漢果というすぐれた徳を希求する行為と、現在の場において直接何等かの現世利益を求めようと願う心は互に異なった動機から発し、そこに統一を求める必要は全くないと考えるビルマ人にとっては、それは何等の矛盾でもなく、従って一考を要する問題とはなり得ない。仏陀や阿羅漢は尊崇せられるが、Nats や星辰は現世利益を祈願する対象であるというのがビルマ仏教徒の解釈である。

2.

ビルマ人は一生の間に十二の儀式を経験する。それは「俗界の祝福」と称する以下の十二の体験と葬式であるが、男は(10)を行わず、女の場合は(11)がないので総計十二となる

- (1) Gabbhavaṣa Maṅgala 妊娠中の安産祈願式
- (2) Vijata Maṅgala 誕生式
- (3) Sirodaka Maṅgala 最初の洗髪式
- (4) Kesacchedana Maṅgala 最初の剃髪式
- (5) Dolākaraṇa Maṅgala 揺籠に入れる式
- (6) Nāmakara Maṅgala 命名式
- (7) Dussagaṇa Maṅgala 着衣式
- (8) Āhāraparibhoga Maṅgala 最初の食事（米飯）
- (9) Cīlākaraṇa Maṅgala 結髪式

- (10) Kaṇṇavijjhana Maṅgala 穿孔式 (女子)
- (11) Sāmaṇerapabbajja Maṅgala 入仏門式 (男子)
- (12) Āvāhana Maṅgala 結婚式 (男子)
- Vivāhana Maṅgala “ (女子)

これ等は別に社会生活上強制されるといった類のものではないが、子供が次第に成長し、社会人として成人して行く過程にあって、親の子に対する望ましき義務として、現在に至るまで伝統的に維持せられて来ている。中でも(10)Kaṇṇavijjhana Maṅgala即ち耳に穴を穿つ式は女子にとって、また(11) Sāmaṇerapabbajja Maṅgala 即ち仏門に入る式は男子にとってもっとも重要なものとして尊重せられて来た。

パーリ語 Sāmaṇera (沙弥)・Pabbajja (入る)・Maṅgala (祝福) の名が示す通り、この儀式はビルマへの仏教伝来以後に出現した純仏教的なものに思われるかもしれない。しかし、パーリ經典中親が子に対して為さねばならない五つの義務(罪惡より遠ざけ、善事を行わしめ、技能を訓練せしめ、適當なる妻女を迎え、時機に応じて家督を譲渡する)を述べた有名な Singālovāda Sutta (南伝大藏經 vol. 8, p.252) 中にこうした全く同一形式の仏道入門式についての記述は見当たらないし、他の經典戒律中にも発見出来ない。ただ南伝律藏の小品・小品と称する部分は犍度分(Khandhaka)といわれ、仏教僧団(僧伽)の団体規定であるがこの中に教団の儀式として重要とされる進具の作法(upasampadā)の規定があり、比丘たらんとする者はそれに相応しい学力が試験され、次で俗服で市中を行列し、授戒堂に於て具足戒が授けられ、この時白四羯磨(びやくじこんま)の作法によって僧伽の比丘達の意見を求め、その許可を要すると述べられていることや、またビルマに伝わる仏伝(ビガンデー氏緬甸仏伝 p.234)によって、釈尊の一子羅睺羅(Rahula)が前世における善良な性情と行情の報酬として、八才の時沙弥になることを許されたという伝説、更にまたアショカ王の時、王の弟 Tissa が仏門に帰依し剃髪した時、王宮から式場まで華麗な行列が行われたという記述を土台にして、その上にビルマ的解釈が加わって出来上って来たものであろう。

沙弥はいわば見習僧である。二二七戒の厳守を要求せられる禁欲的な比丘(ponjee-大光)と違い、外見は比丘同様に剃髪し黄衣をまもっているが、彼等には僅か十戒が要求せられるに過ぎない。敬虔なビルマ仏教徒は日常生活においては常に五戒を保ち、新月、満月及びその中間の八日目、即ち一ヶ月に四回の Sabbath Day には八戒(Uposatha)を守るが、沙弥の十戒はこうした八戒に近く、比丘戒にははるかに及ばない。従って沙弥は外見上僧形ではあっても、それは俗界の延長にしかすぎず、羅睺羅の故事に習い八才を中心に五才から十五才にかけて行われるこの入門式は、形式的にも内容的にも、本来ある可き筈の宗教的意味よりも、むしろ社会的意味にその重きが置かれている。

近代のビルマにおいて、特にその農村にあって、僧院は子供達に対する初等教育の場を提供

して来た。子供達は少年期の四、五年を村の僧院 (Kyaung) において生徒 (Kyaungthas) として過し、読み書きや経典の暗誦に日を送る。ビルマ語では、僧院と学校はともに同語 (Kyaung) で表わされる。こうした寺小屋教育の全過程を了えると直ちにビルマ語で Shinbyu と呼ばれる入門式を受け、引き続いて一ヶ月から三ヶ月の沙弥生活を送る。そして一般社会人として社会に出発して行くのである。従って Shinbyu は学校教育の最後を飾る卒業式であり、更にまたそれが成人―結婚へと連続する第二の人生への出発点でもある。普通 Shinbyu を受ける為の条件としては、(1)剃髪、(2)三帰依文の暗記と正しい発音、(3)長老の許可と黄衣の授与の三があげられるが、それは先づ形を整え、儀式を受けるに十分な知力と徳力を備えることを意味し、それはそのまま寺小屋教育において求められる最終目的でもある。教育の成果がそのまま Shinbyu への条件とされるわけである。

Shinbyu を受ける子供はビルマ王朝時代の王子の服装をする。嘗て一般人にして王族の服装を為すものは死罪を以て罰せられるのが王朝時代の例であったが、Shinbyuに限ってこれを許された。仏教的観点からいえば、王子シッダッタ太子によって仏道が継承せられたとの故事をふまえて、仏門に入る者にかくの如き服装をさせたという説明も当然認められるであろうが、しかしビルマ語の Shin が僧を意味すると同時に口語では王の義を持ち、byu 即ちなることを加えて出来た語であることから考えて、そこにビルマ的解釈の加わる余地があるように思える。シャン族治下のビルマ (1287～1531) において Shinsawbu が Pegu の女王となって七年、彼女が退位を希望した時、王位の継承者として Talaing の二人の僧の孰れかを世継ぎとして選ぶことになり、結局その中の一人 Dammazedi (1472-92) が還俗して Shinsawbu の娘を娶り Pegu の王となったという史実から、Shinbyu を王子の服装によって行う風習が生み出されたものと思われる (G.E. Harvey ビルマ史一五十嵐訳 pp.92-93)。Shinbyu をすませれば、僧門に列せられるとともに王位継承権をも併せ持つ成人として社会的に認められたからに他ならない。

Mi Mi Khaing の Burmese Family によると Shinbyu の一切の義務を了え里に帰って来た男に対し、それを待ちかねたように村の娘達が自己の存在を認めさせようと努力することが述べられている。Shinbyu 当日僧院から式場に向う美々しい行列の中に Kwn Saung と呼ばれる村の未婚の美女連が加わることになっているが、こうした現象は Shinbyu を受けることが結婚適齢としての成人として社会的に認められることを裏書きするのではなかろうか。もっともタイでは美女が入門式の行列に加わるのはシッダッタ太子が修行中魔の誘惑として美女が出現したとの伝説を擬していると説明せられる。以上の如く Shinbyu は一種の元服であり成人式を意味し、単に見習僧として沙弥になるといった現象の裏に非常に大きい社会的意味を持っていると考えられる。

次に、きわめて仏教的である筈のこの儀式に多くの非仏教的、或は前仏教的要素が結びつい

ていることに触れてみよう。先づ先に述べたビルマ民族信仰である Nat との関連である。Nat は、印度教の神々がその発生や機能の別に応じて種々の階層を産み名称を作り出して来た如く、独得のパンテオンを形成している。自然物である樹木や石の Nat がその発生においてもっとも古く、次で個人や村落守護の Nat が現れ、かくして多数の Nat が出現するに及んで、それ等を統一し支配する民族 Nat が現れ、Nat パンテオンの最上位を占めるに至った。それはマンドレーの南にある死火山 Mt. Popa の大山王主 (Lord of the Great Mountain) とその妹、黄金の顔 (Lady of the Golden Face) の二人である。

村の守護神である Nat の祠は村の東の入口に置かれた。しかし Pagan 王朝を創めた Anawrahta 王 (1044—77) の仏教奨励により各地で造寺造塔が盛んになり土俗信仰が弾圧された折、村の守護 Nat もその支配する東の入口を追われ、僧院や Pagoda にその場所を譲った。しかし Nat 信仰を捨てきれない民衆によって、Nat の祠は次第に村の西の門の所に再建せられて行った。こうして仏寺仏塔は東に、Nat は西にと定着し、現在でも都市農村を問わず各家は仏壇を東側に安置する習慣が残されている。ともあれ Shinbyu 式当日の夕刻、子供は村の西門に祀られるこうした村落守護の Nat のいる祠(Nat-shin) に参詣し、Nat に顔見世 (Nat-showing ceremony) を行い、新しい人生への保護と幸せを祈り、無事式の終了を報告するのはまことに奇妙な風習といわねばならない。

Shinbyu と Nat との結びつきはまた別の面にも見られる。式の七日前から子供は親元を離れ、長老の指導の下に僧院において生活することになっているが、これは石料 (Stone-fee) や寝室料 (Bed chamber-fee) と関係がある。両者とも婚礼に関するビルマ社会一般に行われる慣習であるが、婚礼の夜新夫妻の寝室に向って石を投げる村の青年達に花嫁の両親から支払われるのが前者であり、また寝室に入ろうとする花婿を入口に糸を張って通させまいとする村の乙女達に花婿自身から支払われる金が后者である。Shinbyu を受けようとする子供達は、この習慣と同様に、式の直前村人にさらわれ、それをとり戻す為に両親が金を払ったが、この風習と Nat 信仰が結びつき、式の前には子供の Shinbyu を妨害する為 Nat が子供の上に種々の災厄を及ぼすと信ぜられ、それを妨げる為七日間の僧院生活を送らねばならないと理解せられるに至った。

上ビルマの一部では Nat の代りに龍神 (Naga) が礼拝される。ビルマの Naga 信仰は印度のそれや中国の龍信仰ときわめて類似しているが、果してこれがビルマ固有のものであるか、或はマニプールや雲南から伝来したものは明らかではない。とにかくビルマ人は Naga を半獣半靈魂のものと認め、蛇と同一視することはない。従って南印度の一部にあるように蛇、特にコブラを神聖視するといったことは皆無である。ビルマ史の語るところによれば、八世紀プロームにあった Pyu 族の Vikrama 王朝が諸部族の内紛のために滅び、プロームを脱した Pyu 族の避難者がパガンに走った頃、パガンには既に仏教が行われていたが、これは陸

路北印度から伝来したもので、その教師達は Ari と呼ばれていた。彼等は仏僧というより既に印度教の影響を受け秘教化していた密教的なものといわれ、蛇を崇拝し多くの女神を妻とする仏を祀った。今日ビルマに残っている Nāga の像や Nāga 信仰はこうした Ari の名残りであるといわれる。

Anawrahta 王の Nat 信仰圧迫の折、元来村の西にあって東の Nat とともに村落守護の役割を果たして来た Nāga が、Nat の西への移住とともに次第に忘れ去られて来たが、上ビルマの一部に今なお Nāga 信仰が残り、それが Shinbyu と結びついていることは、Anawrahta の改革の影響を受けない古い地域が上ビルマに残されているとともに、上ビルマが海路南印度よりタートンに伝来した南方上座部系統の仏教と違った別な陸路伝来の仏教文化圏に属している証左になるのではなかろうか。

Nat-shin や Naga に顔見世を行った子供は、次で先祖の墓に礼拝をする。これは子孫の一員として、先祖の爲した過去の善行やその徳をわかち与えられんことを祈り、更にまた、彼が現在行いつつある Shinbyu というすぐれた徳の結果を彼等にもわかち与える意味を持っている。ビルマ仏教の説くところによれば、死とは長い輪廻の流れにおいて、現在の生の単なる終りを告げるにすぎず、その人の無始時來の業の結果が残る限り永遠に輪廻転生を続けなければならない。従って、先祖のお蔭によって自分がこの世に生を受けたと考えることは不可能である。先祖とはある意味において自己の投影にしかすぎない。生の終結 (Cutī Citta) は直ちに新しい生への出発 (Pati-sandhi Citta) に連続する。親と子の結びつきは、自己の業の相互の結果としての単なる仮の宿りにしかすぎない。先祖を礼拝し、先祖に祈願をこめるということはビルマ仏教の原則と相容れない行為でなければならない。Shinbyu におけるかくの如き墓地参詣の習慣は、中国的な祖先崇拜思想のビルマ的変容であるとの説が表れるのもきわめて当然のことである。

Shinbyu は通常ビルマ暦の第十一月 (Tabaung)、即ち二月から三月にかけて举行せられるのを原則とする。これは両親にとってきわめて多額の経済出費を強いられるので、農閑期で収穫直後の比較的経済的にゆとりのある時期が好まれた為である。多額の経済負担から逃れる為、同じ年頃の子を持つ親が共同で式を行うことも決して珍らしいことではない。仏教伝来以前のビルマでは、収穫直後の Tabaung の月は感謝祭の行われる月でもあった。Tabaung の満月の夜、農家の主婦達は手に手に果実や菓子を携え、豊穡の女神 Pon-ma-kyi に礼拝を行い、豊作の恵みに感謝し、来る可き年の豊かな実りを祈願した。この女神は巨大な胸と豊かな腹を持ち、信ずる者には豊かな実りを約束する土地を教えてくれると信じられた。この Pon-ma-kyi 信仰の祭典と Shinbyu の行われる時期がともに Tabaung の月であった為両者は次第に混交し、仏門に入る式に Pon-ma-kyi が登場するという奇妙な現象が出現するようになった。Shinbyu の行列が村をねり歩く時、子供達ははやす歌 (Sho) の中に「野に うるおいあれ

かし、流れに、母の胸に、妹の胸にうるおいあれかし」とあるが、ここにいう母の胸に、妹の胸にとは Pon-ma-kyi の巨大な胸を指すものに他ならない。米作につきものの水の豊かさを祈った歌であるが、Shinbyu という仏門に入る式に来る可き年の豊作を祈る歌が使われるのはまことに奇妙な現象である。

式は先づ一年前に両親から村中に予告され、二ヶ月前に占星術師の忠告を入れて、もっとも吉祥な日が正式に決定発表される。式の七日前から子供が僧院に時を過す間、両親は村人の協力により式当日供養される食事や贈物の準備、及び当日使用される新米の脱穀が村の乙女達によって上半月（白月）の夕方戸外で Maung Song を伴奏に行われる。Maung とは脱穀に使われる器具の名称である。この脱穀作業と平行して、Apyo-gyi と称する村の老女による葉巻煙草の製造が行われる。これは参列者への土産として使用せられる。式場は普通天幕または簡単な小屋が設営され、当日は Byo という音楽を伴奏に子供を僧院から式場に移す行列を以て幕が切って落される。行列は、仏典や仏陀の衣と称する品を先頭に、次で僧侶への贈物、美女群、父母一父は子供の寝具を持ち、母は僧として所持を許される八種の日用品、即ち大衣、上著衣、下著衣の三衣と鉢、針、濾水囊、帯、剃刀を頭上にして一、馬または象に乗った本人、本人の友人達一彼等は Rahu と呼ばれる詩を口々に誦する一最後に音楽を演奏する群が続く。行列が式場に到着すると参列者全員による会食が行われ、次で三時から剃髪式、僧による Paritta 経文読誦、黄衣の授与着用と続く。式後子供が村の Nat-shin 及び先祖の基地に参詣することは先に述べた通りである。

以上述べた如く、Shinbyu は仏教の重要な行事であり、印度的要素を中心にふまえて構成せられてはいるが、しかしそこにはかなり農耕民族としての変容や中国文化の影響、更にまたビルマ民族の土俗信仰である Nat や Nāga が混全と結び合されているのを見ることが出来、そこにまことにビルマ的な儀式が生れ、発展し、現在に及んでいるのである。また Shinbyu に見られる宗教性より社会的意味の重要さは、Shinbyu の後二十才で初めて許される沙弥から比丘になる第二の得道式にも見られ、この式の社会的意味の重さと土着信仰との結合の度合は、けっして Shinbyu に勝るとも劣らぬものがある。この第二の得道式にあっては、比丘となった証拠として身体に入墨を施す例が多い。比丘になることは、一生を禁欲生活と聖なる世界に満足することであり、勇気と男性らしさの大いなる試練でもある。これを証するしるしとして、装飾の意味を兼ねて入墨が行われるわけであるが、この時肉体に切りこまれた入墨は、ビルマ人にとって装飾以上の何物かで、特にある種の魔力や吉兆がひそんでいて考えられる。この為入墨の模様としては Naga や猫等がよろこばれ、時には無意味な呪術的マークも用いられる。

Dr. Maung Maung はその著 Law and Custom in Burma and the Burmese Family の中で「近代特権階級、民主主義概念、法や政治形態における英国流の理念と実際、占星術、伝統

的慣習と概念、仏教倫理、これ等すべてが混全一体となって奇妙な統合を為しているのがビルマである」(p.116)と述べているが、これは単に政治や法の世界にのみ限定さるべき定義ではなく、ビルマ文化全般にわたって、特に純仏教的と見られる Shinbyu 式や、或は印度教と仏教の混合形態と一見考えられる九神崇拝式においても云い得ることである。こうしたビルマ人の生活に働く仏教の複雑な不純性は、それが印度教的神秘性や Nat の素朴な自然崇拝とそれに帰因する咒術的傾向の占める割合が多いだけに、ややもすると秘教的神秘主義に陥りやすい傾きがある。ビルマ仏教が現在のビルマ人の心に生きて働く姿の裏には、常に錬金術や占星術、或は手相人相術の類から Inns と称する文字や数字による方陣により人の命運や吉凶を左右しようとする Burmese Occult Science が存在している。Inns はパーリ語の Arika 或は Ariga、即ち印、肢、部分を意味する言葉を語源とし、文字を入れる為の欄や区切りを持った表を意味している。Inns の発明利用は恐らくビルマのこうした Occult Science の中でもっとも古いもので、紙、貝葉、陶片、金銀箔の上に書かれた神秘的表象が病気の治癒から他人に対する呪の成就まで、きわめて不思議な力を有すると考えられている。ビルマ仏教の支柱である所謂小乗禅が、心の統一と無常、苦、無我の三苦の体得による悟りの道という本来の目的を離れ、ややもすると座禅者の不可思議な力の実現を強調し、その応用として催眠術等の方向に走ろうとするのも、やはりこうしたビルマ仏教の持っている性向の表現ではなかろうか。

1948年一月六日に予定されていたビルマ共和国独立式典は、時の政府が占星術師に相談した結果その忠言を入れて、二日早く一月四日の午前四時半に行われることになったのは有名な事実であるが、ビルマ人の生活や思考から仏教を取り除くことが出来ないのと同様に、こうした占星術や方陣を彼等から除くことも不可能である。1963年一月に発表された BSPP の哲学 (The Philosophy of the Burma Socialist Programme Party) はネーウィン現政府の急進社会主義の理論となるものであるが、その第三項にビルマ社会主義の世界観が述べられている。それによると、世界は三つ——物質界、動物界、現象界——から成立ち、その中物質界 (Okasaloka) は地水火風から出来ており、現象界 (Sankharaloka) は心と物質の事象の時間と空間における連続性にあって表し出される自然の全過程と定義せられている。こうした世界観は五世紀前後に成立したパーリ三蔵の阿毘達磨に見られるものと同一である。即ち心 (Citta) と物質 (Rupa) を対比させ、両者の瞬間的生成消滅の連続性の中に世界を見、物質界を構成する二十八の色の組み合わせの基礎となるものは地水火風の四大 (Mahābhūta) であるとの説と何等相違しない。急進社会主義と阿毘達磨形而上学との結合という一見不可能な組み合わせも、Dr. Maung Maung の定義を借りるまでもなく、それがビルマという場においては混全一体となって共存しているのである。こうしたすべてを包括する共存性の中にビルマ人の生活が成立している。-